

連続セミナー第12回「アジアに学ぶまちづくり」開催 96.4.27

コーディネーター 藤井敏信 (十文字学園女子短期大学)

■このセミナーの意図は2つある。一つは文字通り、アジアに学ぶことである。自発的な運動としてのまちづくりを、アジアのさまざまな事例の中から学ぶこと。もう一つは急速な都市化が進展する中で、スラム地区の拡大、階層格差の拡大などの課題が山積している大都市の実態を知ることである。まずは各パネラーのテーマ解説から始まった。

1. 「アジアのまちづくり」 穂坂光彦 (日本福祉大学)  
 インフォーマルな「住民のプロセス」に発して、フォーマルな都市計画に風穴をあけたい。アジアでは人はまず集まり、住む場所を確保し、それをつなぎながら街をつくる。スリランカのCAPなど各国における注目すべき事例にみられるようにNGO,CBO,NPOの主体的な活動が参加のまちづくりには不可欠である。

2. 「台湾のまちづくり」 浅野 聡 (三重大学)  
 都市化の進む台湾の歴史的環境保全の現状と課題について、台北などの事例をもとに説明。特に日本との比較でいえば財産権を巡る考え方に相違がある。

一方先住民族の環境保全については、学ぶべき点が多い。

3. 「フィリピンのコミュニティ抵当事業 (CMP)」 葉袋奈美子 (都立大学)  
 不法占拠地区における住環境整備を行う際に、居住者がまとまってコミュニティとして組織化されていればオリジネーターの推薦により、公庫が居住者に低利で資金を融資する制度がある。有力なサポートになっている。課題は資金の回収率が低いこと、将来土地の個別所有化が前提されていることである。

4. 「タイの都市コミュニティ開発 (UCDO) 事業」 大月敏雄 (横浜国立大学)  
 信用貯蓄の実績をあげているコミュニティを対象に、その組織化を促すと共に暫時環境改善を積み上げていくための融資制度がある。融資機関の理事会にはNGOや住民リーダー

も入り、現在数百地区がメンバーとなっている。その一つとして貯蓄を実践しつつ、自主的に運河清掃を行って、居住の継続を行政にアピールしているソククラの事例を紹介。

5. 「日雇い労働者・地域住民とまちづくり」 土肥真人 (東京工業大学) + 水嶋 陽 (寿生活館)  
 不法占拠による課題は日本にもある。大阪釜ヶ崎における公園囲い込みに対して、参加型の改善提案を行うボランティアな活動の実践や、川崎市の体育館で行なわれた日雇労働者の越冬をサポートする組織的な活動を報告した。環境差別へのたたかいは、居住の権利の獲得を巡ってアジアを結びつける。

■会場にはなじみの会員の方々のほかにも百人を超える学生が集まった。参加した十文字短大の学生に感想を聞いた。

●私たちには家族と共に生活する家があり、それが当然のように暮らしているが、アジアのいたるところに住み続ける場所を求める人々がいることに、思いが至らなかった。

●日雇い労働者の不法占拠について、強制撤去が得策のように考えられているようだが、こうした課題に正面から向き合い、自主的な活動の組織化など柔軟な対策を講じていかなければならない。ソククラの事例には興味を覚えた。

●「NGO,CBO」など耳慣れない言葉が次々とでてきてよく理解できないまま話が終わった。もっと予備知識をもって参加したかった。その中では住環境がコミュニティの結末次第で改善されるというCMP事業は面白いと思った。

●都市化によって歴史的環境も失われているが、台湾における先住民族の文化財の保全運動に学ぶべきだ。

■パネラーの真剣な語りかけにより、時間は当然のようにオーバーしてしまった。特に公と私の間で介在し、多様な展開をみせる「共」の部分についての位置づけ、経済基盤の在り方や、更に全体としてのアジアの人口増加をどう受け止めていくかを巡って白熱した議論が展開された。

